

仕事の中の人生

わたなべとしお

渡辺利夫 (公益財団法人オイスカ会長)

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任(二〇二〇年十二月、退任)。二〇一七年六月より現職。

スズキのトップを四十年以上つづけてきた鈴木修さんが会長から相談役へと退いた。しかし、今後とも仕事への集中を切らすつもりはないという。現在九十一歳である。この機に日経新聞の取材に応じ、「昨今『人生百年時代』と言われます。まさにそれを地で行く人生ですね」と問いかけられた鈴木さんは、「当たり前の話ですから。生き抜くということが重要なのではないでしょうか。人間が生き抜くために仕事はある。仕事は私にとって呼吸なのです。それくらい自然なことですよ」と応じて、まったく外連れを感じさせない(二〇二一年八月二十七日付、朝刊)。

人間の心身機能発揮の場は、子供にあっては遊びであり、長じるとともに仕事へと移っていく。この世に生を受けて以来、人間は厳しい現実を必死に生き抜いてきた。それを可能ならしめたものが仕事である。人間の心身機能は仕事の中で自在に発揮されてきた、私の心の師・森田正馬まさたけはそういう。

森田に即してさらにいえば、活動こそが自然であり無為は自然に反する。人間の諸器官はその機能を

用いることによってますます強化され、用いなければ萎縮し虚弱になる。私どもがよく知るこの事実を顧みただけでも、活動が人間の自然であり無為が反自然であることがわかる。活動の中核が仕事である。仕事は事にこと仕つかえると書く。自分に仕えるのではない。神経症者を救済するための療法として生まれた森田理論は、症者を現実の仕事へと導くことにより、抑鬱ようつ的な気分になりながらも何事かを成し得たという体験的自信を与え、これにより心身機能発揮の爽快さを感じさせ、神経症者の「即我的」態度を「即物的」態度へと転じさせることを基本とする。

仕事を通じてなされる心身機能の発揚が神経症の克服にとっていかに大きな意味をもつか、森田は神経症者との交流の中でこのことを悟らされながら療法りょうぽうの完成へと向かっていった。もちろん語りの文脈は森田とは異なるものの、「人間が生き抜くために仕事はある」という鈴木さんの発言に、私は胸に熱いものを感じた。その記事が私の机の前の壁にピンで留めてある。